

[連載]

## 博士課程生活講座！ ～茂木さんに聞いてみよう～

第6回 先行研究の読み方（博論編）

茂木俊伸

若手研究者から院生に送るエッセーです。ちょっと先輩の声に耳を傾けてみませんか？ 何か新しい世界が見えてくるはずです。

[企画]

飲み会の席でついつい後輩に勧めてしまいたくなる書籍  
「ビブリオバトル 大学院生大会」(2018年10月7日開催)より

日本語／日本語教育研究会では、2018年10月7日（日）に第10回研究大会のプログラムとしてビブリオバトルを行いました。テーマは「飲み会の席でついつい後輩に勧めてしまいたくなる書籍」。当日、取り上げられた作品は以下の通りです。

井上優『相席で黙ってられるか一日中言語行動比較論』

森田良行『話者の視点がつくる日本語』

川原繁人『「あ」は「い」より大きい—音象徴で学ぶ音声学入門』

李在鎬（編）『文章を科学する』

友定賢治（編）『感動詞の言語学』

ビブリオバトルに来られなかった人のために、ここでは各登壇者に報告を書いてもらいました。お楽しみください。

総務委員 岩田一成・建石始

## 第6回 先行研究の読み方 (博論編)

---

茂木俊伸 (熊本大学)

このエッセイでは、日本語学・日本語教育学分野の博士課程(博士後期課程)にいる人、または博士課程に進学しようと考えている人に向けて、若手(だという自信がなくなってきた)大学教員が、自分の経験の中で「後輩たちの役に立ちそうなこと」について語ります。

### 1 はじめに

前回まで(第4回・第5回)は、先行研究の読み方を扱いました。今回は、博士論文の準備のために博士論文を読みたいと思います。

「できれば」博士号が取りたいです」と言う学生には、「博士論文をどうやって書こうと思っていますか?」と聞くようにしています。単なる願望で言っているなら、プロ野球選手にあこがれる子どもと変わりません。博士論文の執筆には、現実的な計画が必要です。そのためにはまず、「博士論文とはどういうものなのか」を、自分のこととして考える努力をしてほしいのです。

### 2 博士論文を読む

大学が授与する学位について定めた「学位規則」では、以前は、博士論文を「印刷公表」するものとしていました。例えば、くろしお出版の「Frontier series 日本語研究叢書」や、ひつじ書房の「ひつじ研究叢書〈言語編〉」といったシリーズでは、博士論文をベースにした学術書が多く刊

行されています。このような学術書は、例えば専門分野がやや異なる読者でも読みやすい形にするといったふうに、博士論文に付加価値を与えたものが多いと思われれます（鈴木・高瀬2015）。このように一冊の本の形にまとめられた研究は、専門が細分化されて研究成果が次々に出される現代においても、一つの体系的な「世界」を構築しているという意味で、大きな価値があるとされています（橋2016）。

大学に提出する博士論文の読者は限られますが、内容が一つの世界としてまとめられるという点では同じです。この「まとまった世界」を作ることが、博士論文の最大の難関だと言えます。このため、同じ研究室の先輩の博士論文を参考にして、議論のまとめ方を勉強することも多く行われてきました。

そんな中、2013年の学位規則の改正によって、博士論文は原則インターネット公開されることになりました。国立情報学研究所の博士論文データベース「CiNii Dissertations」(<https://ci.nii.ac.jp/d/>)では、学位を授与した大学（機関リポジトリ）で公開されている博士論文の本文を探すことができます。今回は、こちらの「生」の博士論文を集めて読んでみましょう。

### 3 博士論文を読むポイント

入手した博士論文は、もちろん熟読してもらってもいいのですが、「博士論文とはどのようなものか」を理解することが目的であれば、優先的に読むべきポイントは、次の2点です。

- 1) リサーチクエスチョン（いくつかの、どのような問題を解決しようとしているか）と、それに対する答え（どのような答えを出しているか）
- 2) 論文の構造（いくつかの部分をもどのように組み合わせているか）

このうち1)は、「博士論文ではどの程度の大きさの問題を扱えばいいか」という疑問に対するヒントになります。研究として取り組むべき問題は無限にあります。大きすぎる問題に取り組んでも苦しむので、後期課程

の3年で一定の答えが出せる問題の大きさの相場を理解する必要があります(もちろん、これはより大きな問題の一部として位置付けられます)。

2)は、「博士論文をどのように組み立てればいいのか」のヒントになります。博士論文は、本1冊に相当するボリュームを持っています。第3回で触れたように、一般的に博士論文の各章は、雑誌などに発表した内容をもとに書かれます。まずは、いくつかの論文(パーツ)があれば博士論文の骨格ができるのかを知ることが、自分にも博士論文を書けるかどうかを見極める材料になるはずです。

ちなみに、論文中の「既発表論文等との関係」のような項目を見れば、論文の筆者がそれ以前にどのような準備をしていたのかが分かります。逆に言えば、どの程度の書き下ろし(新規執筆)が必要かの目安になるということです。

#### 4 博士論文の「地図」を作る

ここでより重要なのは、博士論文のパーツとしての章の数ではなく、論文全体の構造です。寄せ集めの論文集ではなく、一つのまとまりを持った論文として、あるテーマがどのように表現されているのかを俯瞰できる地図が必要なのです。通常の論文と同様、博士論文にも一定の章立ての型があるとされます(例えば、フィリップス・ビュー2018)。しかし、内容の流れから見ると、途中で分岐して複数の章が並べられたり、再びそれらを総括する形の議論が行われたりするなど、論文全体に関わる部分(総論)と個別具体的な事例を分析した部分(各論)の組み合わせには、さまざまなバリエーションが見られます。

ここで言う「地図」とは、博士論文の筆者が、論文全体に通底する問題意識を、どのような形で、いくつかの議論として具体化し、相互に関係付けて配置しているのかを指します。簡単に言えば、それぞれの章がどのようなつながりを持ち、全体としてどのような問題に対する答えを出そうとしているのか、ということです。

このような俯瞰視の意識を持つために、私は授業で「博士論文を集めて、

その目次を構造化する」練習をしてみました。集めた博士論文の目次と各章の内容を簡単に確認し、章相互の関係を線でつないだ構造図として描いてみるのです。構造化が容易にできる論文は、読みやすい論文です。そうでない論文との間には明確な差が出ます。この実践で最も構造化が難しかった論文は、「いくつかの事例が並べてあるだけで、それらを総括する部分がない」ものでした。また、章ごとに調査の内容や使用データが異なるのに、なぜそれらが一つの論文になるのか、明確な説明がないものもありました。論文全体における事例の位置付けが分からないのでは、「まとまった世界」としては理解されないでしょう。

一方、この点に自覚的で、冒頭に構造化した図を提示してくれている博士論文もあります。次の図は、井戸（2017）の序章に挙げられている図を抜粋したものです。この図では、総論と各論の配置関係や、各論が構成するまとまりが明示されています。また、ここでは省略しましたが、論文で取り上げている2つの主要な問題と章立てとの対応関係も示されており、書き手の構成の意図が分かるようになっています。

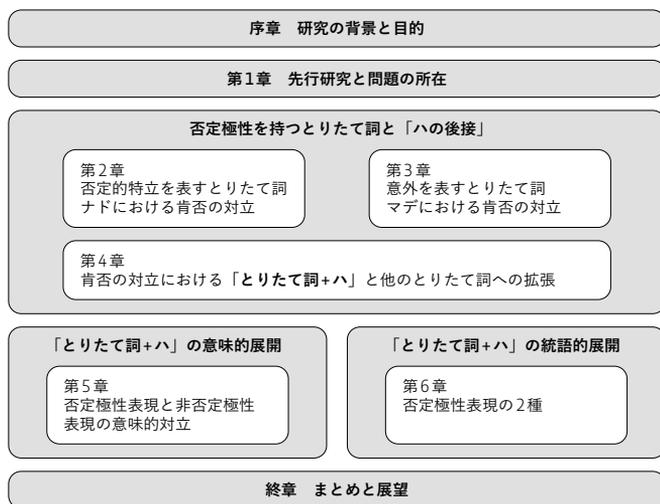


図 井戸（2017）の構成見取り図

最終的に博士論文に図として示すかどうかは別にして、いずれ自分の手持ちの内容が増えてきたときには、それらを構造化してみるようになるでしょう。その前の段階として、他者の博士論文の構造を読み取ってみることが、自分の論文の構造を意識するための練習になるのです。

## 5 おわりに

論文を読むときには、どうしてもその内容に注目しがちです。しかし、多くの論点を扱わざるをえない博士論文では、その書き方に注目して読むと、「どうやってまとまりを作るか」「自分だったらどう書くか」を考えるいいトレーニングになります。

まずは、具体的ないくつかの「まとまった世界」を分析してみることをお勧めします。そのうえで、指導教員の経験も聞きながら、博士論文の構成について定期的に議論するのもいいでしょう。

### 参考文献

- 井戸美里 (2017) 「とりたて詞の統語と意味から見る日本語否定極性表現の研究」筑波大学博士論文
- 鈴木哲也・高瀬桃子 (2015) 『学術書を書く』京都大学学術出版会
- 橘宗吾 (2016) 『学術書の編集者』慶応義塾大学出版会
- フィリップス, エステル M・ビュー, デレック S. (角谷快彦訳) (2018) 『博士号のとり方 [第6版] 一学生と指導教員のための実践ハンドブック』名古屋大学出版会 (※第1回で紹介した本の改訂版)